

山の本を楽しむ

藤井 諭

第16回 小暮理太郎著「山の憶い出」

【概要】

この本は日本山岳名著全集2（あかね書房）で田部重治の「日本アルプスと秩父巡礼」とともに掲載されている。小暮と田部は常にパーティを共にし、奥秩父の雲取山から金峰山までの主脈、峠、沢などを切り開き記録を残している。また槍ヶ岳から日本海までの大縦走や毛勝・剣・黒岳の踏破も行った。小暮は第三代の日本山岳会会長となった。同じ東大でも文系の田部の名文とは異なり、理系の小暮は歴史、民俗学に深い造詣を持ち、緻密で科学的な表現を特徴としている。

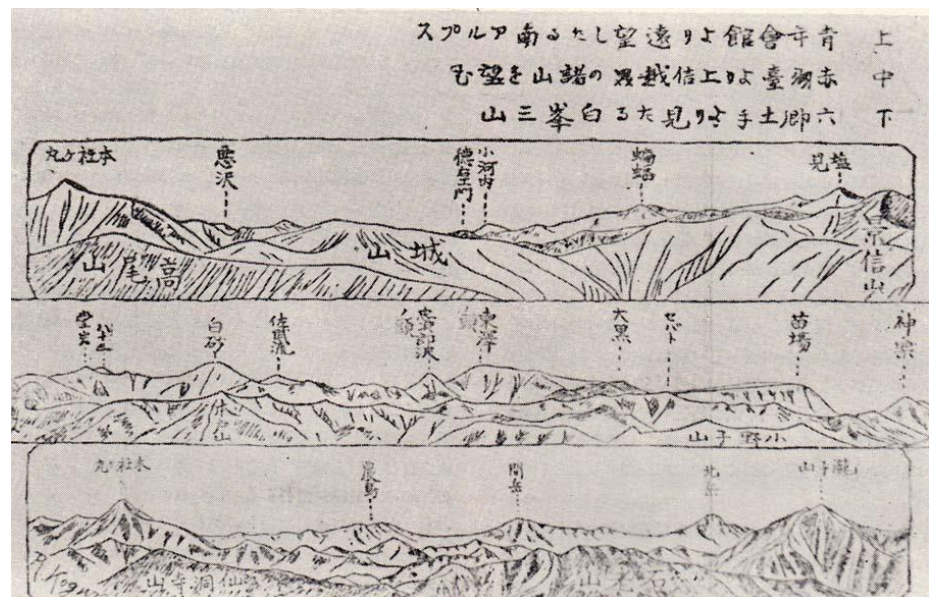
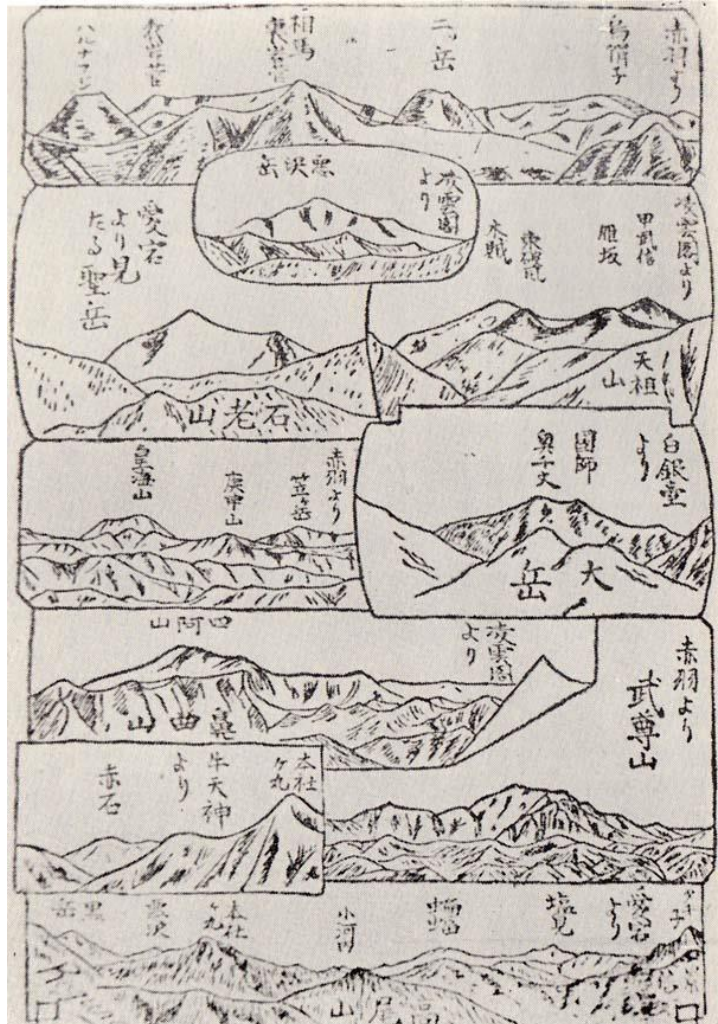
【内容のポイントと感想】

この本は次の章から構成されている。

1. 秩父の奥山
2. 利根川水源の山々
3. 三国山と苗場山
4. 秋の鬼怒沼
5. 黒部川をさかのぼる
6. 望岳都東京
7. 日本アルプスの五仙境

私が最も興味を惹かれたのは、6. 望岳都東京 である。ここには小暮自身のスケッチによる東京から見える山が細かく正確に記されている。上図のスケッチには烏帽子岳、悪沢岳、聖岳、奥秩父、四阿山、赤石岳など東京から見えた姿が示されている。下図には南アルプス稜線、上越の山、白峰三山が記されている。次はそれらの紹介文の一節である。

2000メートル以上の山をこれ位多く見られる場所は、東京以外にはまずないのであります。飛驒の



高山はあるいはどうかと思いますけれども、それは 3000 メートル以上はあるいは東京より余計見えるかもしれません。しかし 2000 メートル以上を七十幾つも見ようなんていう贅沢なことは、山国の都会でもほとんどないのであります。関東の大平野の一隅にある東京市中から、これ程多くの山が見えるということは、たいていの人が恐らく意外とする所であろうと思います。しかし又一方においてこういう大平野の一隅に在ればこそ、これだけの高い山が見られるのだともいえるのであります。私の友人の一人は、東京から見える山へ皆登ってみたいと言っていました。どうしてこの七十以上の山を登るのは中々容易ではない。その範囲は一府八県にわたり、九カ国にまたがっておりますから、かなり広い区域を含んでおります。その中で三千メートル以上の山について一寸申し上げて見ますと、富士山は別として、南アルプスには三千メートル以上の峰が十座ありまして、その中の八座までが東京から見えます。仙丈岳と奥西河内の二座が見えない。北岳、間ノ岳、悪沢、赤石、農鳥、西峰、塩見、聖、これだけはすっかり東京から見られます。

次は私も好きな甲武信岳のスケッチの記録である。ここでその場所となった凌雲閣は今のスカイツリーにあった 12 階建て 52 メートルの“戦前のスカイツリー”と言われた建物のことである。

2400 メートル台の木賊、甲武信、三宝の三山ですが、その甲武信岳をはじめて私が見ましたのは、凌雲閣の上からでありました。その頃はよく凌雲閣に出かけたもので、ちょうどあそこから飛び降り自殺をした人があったりして、その数日後に行った時など、私がしばらくたっても降りて来ないので、下では不審に思ったと見えてこっそり様子を見に来ました。所が相変わらずな何か一生懸命書いているので、安心したように降りて行ったことなどがありました。ある日のこと閣上で一時間二銭の双眼鏡を借りて、秩父の山を物色していますと、雲取山と芋ノ木ドッケとの間に甲武信岳らしき幻影のようなものをちらと認めたので、はっと思ってこれを確かめようとしたのですが、建物は二十年とかの保証期限とうに過ぎた古いものなので、風の強い日はブルブル震えます。そこでスケッチするのですから容易ではありません。この日も手がふるえて、双眼鏡の中で山がおどっています。それに双眼鏡も倍率が小さいために、何山だかついに見極められなかったのであります。それで早速中村清太郎君の所へ行ってその話をしましたが、甲武信岳なんて見えるはずがなからうと、中々頑強に抵抗してうんと言いません。それで今度は八倍の双眼鏡を持って行って、正に甲武信に相違ないことをたしかめ、そのことを中村君に書き送ってやった所が、どうも大変なことになったなアという返事をくれました。

小暮の最もパイオニア的な記述は 2. 利根川水源の山々 である。清水峠、笠ヶ岳、朝日岳、丹後山、大水上山、兎岳、平ガ岳、至仏山の登頂記録が正確に記されている。昨年の MHC 遠征登山で越後三山を縦走した時、中ノ岳の左に聳える立派な山があり、それは兎岳だった。その向こうには大河の利根川が流れている。小暮は利根川の水源については地形をくまなく歩いて観察し、大水上山と命名している。次はその一節である。

兎岳が利根の水源と誤られ易い例は他にもある。私達の連れて行った人夫の一人は、かつて測量部の荷持となって、平ガ岳方面から山稜を水源地向けて縦走したものであるが、兎岳を指差しながら「あの山へつながっているとばかり思っていたが、行ってみたら違っていた」と話した。もし何人にもあれ地図を見ないで初めてこの地方に来て、南方から兎岳を望見したならば、利根川兩岸の山脈は兎岳において合するものと思わぬ者はないであろう。さもあればあれ利根川の水源は兎岳ではなくしてその南に位置する山である。刃の如くそばだった巖山ではなくして、弧の内面を東に向けて彎曲して南北に延びた頂上の平らな山である。私は利根の水源であるが故に利根岳又は大利根岳の名を認容するにやぶさかなるものではないが、この局限したややもすれば利刃の如き巖山しやすいせつかな名前よりも、正保図に記載されて不幸にも水上村の人にすら忘れられてしまった荘重な大水上山の名を既記の駒ヶ岳の場合とは反対に復活せしめて、再びこの山に与えるのがもっとも良いと思うのである。

(年の区切りでこのシリーズは一旦終了します)